

茨城大学の『今』を伝える広報誌

iUP 2013

IBARAKI UNIV. PUBLIC RELATIONS
MAGAZINE vol.04

[地域連携 特集号]

地域とともに これまでも、 これからも

地域と歩む教授陣

卒業生たちの今

現役学生と地域

茨城大学のこの一年

発見！茨城大学



[地域連携 特集号]
**地域とともに
これまでも、これからも**

伊達政宗の「密書」を救出	4
○人文学部・高橋修教授と茨城史料ネット	
小中学生の理科教育を推進	5
○教育学部・山本勝博教授の活動	
高校と大学の連携	6
○理学部・折山剛教授とSSH	
植物の免疫力を高める技術	7
○農学部・佐藤達雄准教授と地元商工会	

地域と歩む教授陣

常陸大宮市の誕生と共に	8
○西野由希子教授・小原規宏准教授[人文学部]	
各地のワークショップで美術教育	10
○片口直樹准教授[教育学部]	
茨城県北の「ジオパーク」を推進	12
○天野一男教授[理学部]	
地域に開かれた工学部を	14
○米倉達広教授[工学部]	
農地の再生に挑む	16
○西脇淳子助教[農学部]	

茨城大学のこの1年

地域連携と研究・発表の成果	18
---------------	----

卒業生たちの今

高野史緒さん 作家[人文学部卒]	20
松本祐一さん 作曲家・アーティスト[工学部卒]	22
横田修一さん 有限会社横田農場代表取締役[農学部卒]	24

現役学生と地域

茨城大学地域活性化プロジェクトチーム「さとみ・あい」	26
○人文学部 白土可奈子さんほか	
「こどもふれあい隊」	28
大子町における、地域活性化プロジェクト	
○理学部 相良祐希さんほか	

発見！茨城大学

広域水圏環境科学教育センター	30
教育関係共同利用拠点認定	

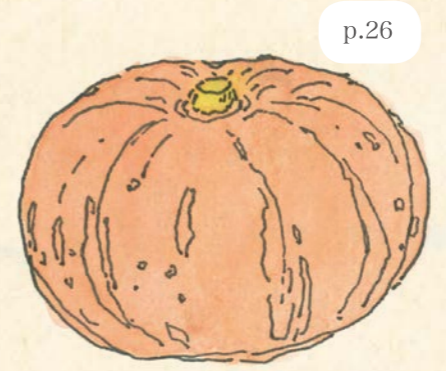
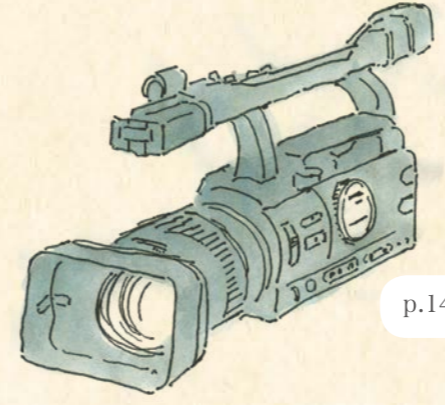
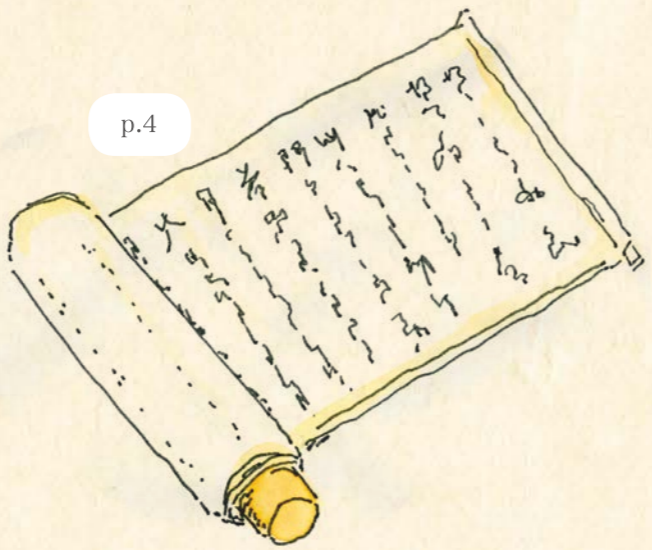
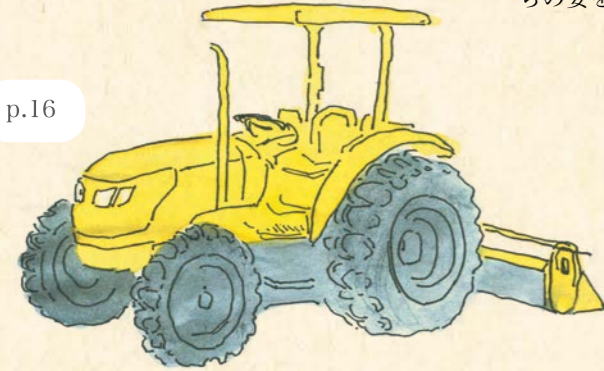
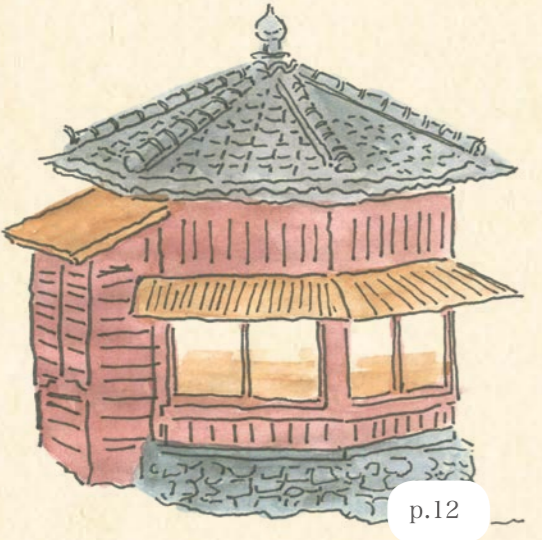
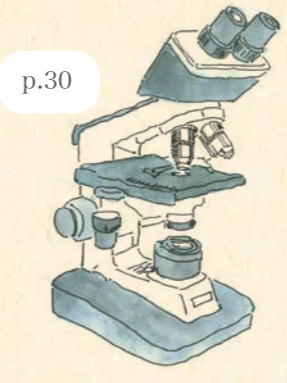
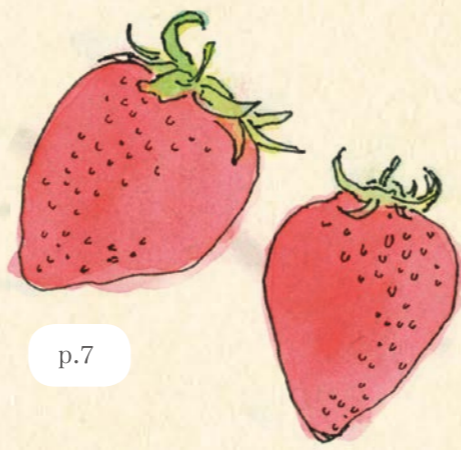
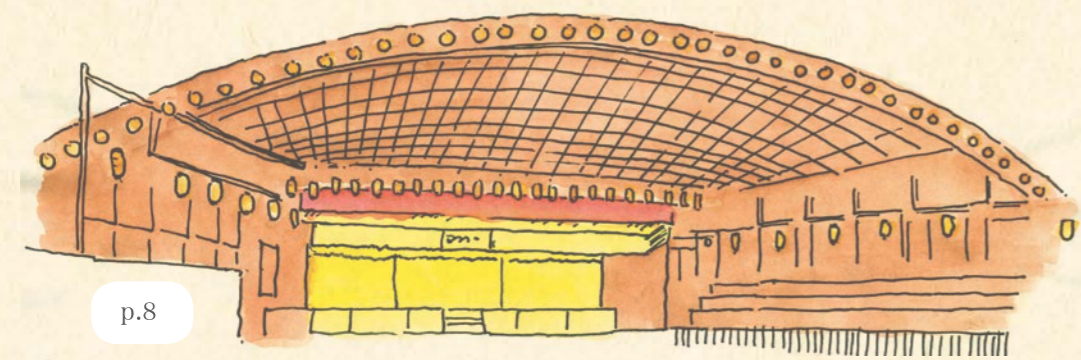
[地域連携 特集号]

地域とともに これまでも、 これからも

茨城大学は、1949年に新製の国立大学として発足以来、地域の皆様に支えられ、地域に根ざした総合大学として、教育、研究、芸術、文化、産業の振興に寄与してきました。2009年に定めた大学憲章においても、地域連携活動を大学の主要な目標として掲げ、毎年「日経グローバル」が実施する大学地域貢献度ランキングでは、常に上位にランク入りしています。

地域に支えられ、頼りにされる大学として、「地域と共に発展する大学」をめざして、これまでも、これからも、地域連携活動を積極的に進めていきます。

今号の「iUP」(アイアップ)では、地域とともに歩む茨城大学の教授陣、学生たちの姿を、ごく一部ですが、ご紹介します。



2011年3月11日は私たちに
とって忘れられない日となりました。

「東日本大震災」で被災した人々は、以前の生活を取り戻すために今も郷里の復興につとめています。しかし、その行程でたくさん大事なものが失われてしまったという悲劇もありました。そこで、被災した家屋、土蔵、石蔵などを取り壊す際、その家に伝えられてきた帳簿やアルバム、町内会の記録など様々な資料が損なわれたり、廃棄されてしまうような事態をくい止めるため、高橋修教授と「茨城史料ネット」の人々が立ち上がりました。

「文化財として国や市町村が指定し保全する、天下国家に影響を及ぼすような資料、一般家庭に受け継がれている地域や家族の歴史を語る資料、どちらも同じように貴重なのです。大切な歴史資料を少しでも多く残して、後世に伝えたい」

この思いを胸に、震災直後から高橋教授たちは活動を始めていました。

津波で損傷した公文書や文化財の修復保全が急がれる一方、震度6強に見舞われた内陸部では、損壊した建物の取り壊しや修復に伴い、旧家の古文書や、行政文書が失われてしまうおそれがありました。本学の教員、学生を中心に県内外から集まるボランティアから結成された



高橋 修
人文学部教授、
五浦美術文化研究所長
中世武士団の研究を専攻。
フィールドワークを重視。
地域の宝を守る活動は、研究
させてもらう身として当然、
という



震災から救出された古文書などを丹念に調べ、それが歴史的な発見につながった。高橋教授を中心とした茨城史料ネットは「専門分野を生かして復興支援できれば」と教員、学生や県内外のボランティアで組織され、史料保存に努めている

01

東日本大震災 廃棄の危機から 伊達政宗の「密書」を救出

「茨城史料ネット」の人々は、そうした資料の救出作業に力を注いだのです。この作業の中、ひたひたなか市の商家の土蔵から発見された多くの資料のうち、五通の古文書が歴史的に非常に貴重な史料であることが分かりました。奥州の戦国大名・伊達氏と、額田城(現那珂市)の小野崎氏とが親密な関係であったことを示すもので、そのうち一通は、伊達政宗が小野崎氏へ送った「密書」とも言うべき起請文だったのです。それは、佐竹氏支配下にあった小野崎氏に謀反を促す内容で、伊達氏が関東への勢力拡大を謀っていた証拠となる歴史的発見でした。



保存状況も、写真撮影などで克明に記録に残していく。地道な作業はこれからも続く

長

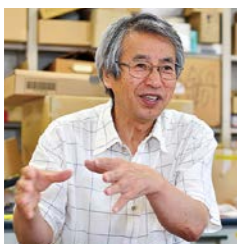
年理科教育に携わってきた山本教授は、理科教員研修などのほか、小学生などを対象とした講座にも積極的に取り組んでいます。

そのひとつに、水戸市の森林公園で開催される「草木染め」体験学習があります。公園内に自生するさまざまな植物を用いて草木染めを行うもので、「ヤシヤブシ」と呼ばれる植物を使って水戸の伝統的染料「水戸黒」を再現したり、あるいは植物そのものを布に転写する「たたき染め」などを指導しています」と、山本教授は活動の様子を説明してくれました。

また、水戸市水道局の依頼で設定した実験教室には学生たちも助手として参加し、アメンボによって表面張力を確かめる実験、水の味を飲み比べる実験、水蒸気で紙を焦がす実験など、子どもたちの興味を引くための工夫を凝らしました。

県教育委員会と連携して実施する、「夏休み自由研究相談会」では、教育学部以外からも協力を得て、子どもたちの興味関心を育て、優れた理系人材を育てるための土壌づくりに力を注いでいます。

「何事もそうですが、組織的にやることでより高い効果が生まれます。教育学部はもちろん、理学部、工学部、農学部と、全学をあげて理科教育に取り組んでいます」



山本 勝博
教育学部教授
高校教員、大阪府教育センター主任研究員を経て茨城大学へ。理科教育・化学教育の研究者。理科教材開発にも力を注ぐ

02

小中学生の理科教育を推進 理科への興味を育てる



子どもたちの興味がわくような実験を通して、理科への関心を高める。山本教授の開発した教材は、全国の理科教育の現場で使われることも多い。「子どもたちが楽しく実験できることが大切」と話す

「と、山本教授は総合大学の強みを強調します。



山本教授の研究室で飼われているカイコ。生き物を飼育することで、子どもたちの科学的な好奇心を引き出すことも

「私自身、小学生時代の理科の先生が色々な実験をしてくれたのがきっかけで科学が好きになりました。基本的に小学生は科学が好きです。中学、高校と進むと化学式などの勉強が必要になり、難しく感じるようになるので、特に小学生時代に楽しく科学に触れることが大切なのです。科学を根っから好きになり楽しむことが出来れば、継続性が生まれます」

さらに山本教授は理科教員へ提言します。「子どもたちに楽しく実験を見せてあげると同時に、先生自身が楽しくと思わなくてはなりません。特に理科の先生は何か得意分野を一つ持つことが大切。最近では教員が校務に追われ、フィールドワークなどに割く時間が少なくなっている現状に対して、特に危惧の念を抱いています。」

山本教授は訴えます。「どんな環境でも何か一筋に研究・観察などを続けてほしい。特に、これからの日本を支えるのは科学技術分野です。科学を探究する楽しさを知る人間が支えるのです」。地域で理科教員を支え、子どもたちに理科の楽しさを伝え、理科好きの人材育成に貢献することがこれからの日本の未来を支えることへとつながっています。

文 部科学省は平成14年度から、理数系の人材育成のために大学との緊密な連携を図るなど先進的な理数教育を実施する高等学校を「スーパーサイエンスハイスクール」(SSH)として指定する事業を開始しました。

「日本はエネルギー資源が自給率4%と乏しく、食料自給率でもカロリーベースで40%ほどです。資源のない国では科学技術・理系の人材育成が重要ですが、日本は先進国の中でも特に理数系離れが問題となっています。理数系人材の育成は、国として取り組まなければならない大きな課題でした」と折山教授はその背景を説明してくれました。

茨城県立水戸第二高等学校が指定を受け、茨城大学と水戸二高との高大接続の人材育成の取り組みが始まったのは平成18年度でした。

申請時から水戸二高のSSH事業に関わり支援を行ってきた折山教授。「SSHの指定校は5年ごとの指定を受けます。平成18年度から22年度までは、『科学大好き人間の育成』と『国際的に活躍できる女性科学者・技術者の育成の基盤づくり』を目的としました」

茨城大学は、事業運営に関する委員会の委員として関わるほか、高校2年生が各自にテーマを設ける「課題研究」のために、高校にはない分析機器や測定機器を提供したり、研究への助言をするなど、多くの支援を行いました。

第一期の活動が評価され、水戸二高は平成23年度から新たに5年間の再指定を受けることになりました。第二期にあたっては、「①次世代を担える科学的素養

03 高校生の理数教育を支援
高校と大学の連携で
日本の未来を豊かに



今年から茨城県立緑岡高校もSSHに指定され、生徒たちの研究支援を行う。各種分析機器の提供や研究に関する助言など、学部全体での協力態勢を敷く



折山 剛
理学部教授、理学部長
有機化学を専攻。水戸二高のSSH運営指導委員会、高大接続委員会の委員長を務める

を備えた女性の育成、②積極的に世界を目指す女性科学者育成の基盤づくり、③小・中学校等に対する科学への夢を育むための教育支援の研究と開発」の目標を掲げています。

水戸二高は全国のSSH指定校201校(平成25年度)の中、素晴らしい業績を上げています。平成23年11月には水戸二高生が発見したBZ(ペロウソフ・ジャボチンスキー)反応に関する研究成果が権威あるアメリカの科学専門誌に掲載されるという快挙を成し遂げ、平成24年度のロレアル・ユネスコ女性科学者日本奨励賞特別賞を受賞しました。平成25年8月には、SSHの全国の生徒発表会で、水戸二高の生徒のアカガエルに関する研究発表が最高賞の文部科学大臣表彰を受賞しています。

「これらのような特筆すべき成果も大事ですが、裾野を広げる効果も大切です。SSH出身者が、世界的な科学者や技術者にならなくても、理系の企業に就職しなくても、科学技術を理解する市民となり、世の中で起こる科学的現象を冷静に判断・評価できる社会をつくる。母親になれば、その子どもに科学リテラシーを受け継いでゆく。そうして、賢く豊かに生き、未来の日本を支えるのです」

佐 藤准教授は農作物にお湯をかけることで免疫力を高め、病害虫を防ぐという「熱ショック療法」ともいうべき栽培方法を研究しています。その実用化に向けて研究対象として選んだのがイチゴでした。

イチゴを栽培する際、使用する農薬に対して病害虫が耐性をつけてしまう問題があります。また、イチゴが実をつけるためにはミツバチなどの昆虫による受粉が必要ですが、花粉を運ぶ昆虫に影響を及ぼさないよう、農薬の使用にはどの農家も非常に気を遣います。

佐藤准教授は「農薬の代わりにお湯をかけて病害虫を防ぐことで、農家にとっては農薬散布作業の削減につながることも、イチゴで問題となるうどんこ病の薬剤耐性菌に対しても効果があります。受粉昆虫にも悪影響を与えない。環境負荷を軽減する栽培法です」と、温湯散布の効果を説明してくれました。

お湯をかける栽培法で生産したイチゴを「湯母」と名付け、農学部地元阿見町の名をとったマスコットキャラクター



農学部のハウス内で育つイチゴ。湯を浴びたことで農薬散布回数は1/3以下となり、色ツヤもよい



植物に湯をかけることで免疫性が高まる性質を見つけた佐藤准教授の研究成果は、イチゴ栽培に応用された。農学部のある阿見町では「湯母」として町の特産品にしようと、さまざまなイベントを開催する。大学の研究成果が地域に大きな役割を果たす



佐藤 達雄
農学部准教授
園芸生産技術を研究。湯をかける栽培方法を発明。その技術は全国へ広がる

「湯母あみ」を制作、女子学生によるコスプレ隊を結成するなど、PRに力を入れました。

ほどなく地元龍ヶ崎市や阿見町のスイーツ業界から、コラボレーションしたいという声がかかり、2012年には阿見町商工会主催で「湯母のスイーツフェア」が開催されることになりました。

「湯母」を使って地元シェフやパティシエたちが新商品を開発し、各店舗で販売する試みです。「フェア開催中、評判の湯母スイーツは、何度か足を運んでもいつも売り切れで、なかなか手に入りませんでした」と佐藤准教授。開発者本人さえ入手困難な人気商品も生まれました。「湯母」は、徐々に地元特産品として一般の市民に浸透しています。

「農業に対して先進的な取り組みを行っている佐賀県や、震災復興に取り組みむ東北で、お湯をかける栽培法の実証試験が行われることになりました。地元農家の方も見学に訪れています。研究室のメンバーが一丸となって築き上げてきたノウハウで、地域の農家はもちろん、日本の農業に貢献したいですね」

04 お湯をかけることで
植物の免疫力を高める
全国に広がる技術



常陸大宮市の誕生から 合併町村のネットワークに関わる

平成の大合併に伴い、茨城の那珂川以北の県北地域は旧大宮町、山方町、緒川村、美和村、御前山村が合併して2004年に「常陸大宮市」が誕生しました。

翌年四月、常陸大宮市は茨城大学文学部と「地域連携協定」を結びました。新しい市政運営に大学の力を借りて、まちづくりを進めていこうというコンセプトに基づいたものでした。人文学部の教員が中心となって市の総合計画の策定や市民憲章づくりなどを支援し、「まちづくりシンポジウム」「市民大学講座」「森を活かしたまちづくり」の共同研究等をたちあげ、常陸大宮市との関係を深めていきました。当初から地域連携協定に関わってきた西野由希子教授は語ります。「新しく誕生した市のまちづくりをお手伝いすることからスタートしましたが、やがて地域の人々の呼びかけに応じて学生たちも参加し、授業ばかりではなく自主的に現地を訪れるようになりました。こうして学生と常陸大宮市民との交流が徐々に広がって行きます。

カフェ、伝統芸能の農村歌舞伎の舞台設営や運営をサポートする「西塩子の回り舞台」、地元小学生の体験プログラムを支援する「郷土教育を提供する活動」、貴重な文化財である西ノ内和紙を紹介する「和紙プロジェクト」、常陸大宮市の魅力を全国に発信するための「ひたちお！宮通信」の発行や「和紙のポスター制作」、1年間の調査・研究の成果を発表する「アクシヨニミティング」の開催など、枚挙に暇がありません。

さらに常陸大宮市で開催する「常陸大宮キャンパス」での集中講義や「まちづくりシンポジウム」から生まれた市民団体の「まちづくりネットワーク」、茨城大学文芸部による創作作品集「常陸大宮物語」の出版、常陸大宮市報での学生のリレー連載など、今や常陸大宮市と茨城大学は切っても切れない強い絆で結ばれているのです。本来は中国文学を専攻する西野教授ですが「地域連携を通して学生たちは大きく成長しています。地域の人と触れ合って、自分たちが役立っているんだという喜びを発見しています。それぞれの研究で次に進むことを考えるようになりました」と、地域連携のすばらしい効力と学生た

ちの成長を絶賛します。

地理学を専攻する小原規宏准教授も学生たちの積極性を高く評価しています。「私自身も農業と人の営みとの関わりを研究の対象としていますが、茨城は最適なフィールドで、常陸大宮市などの地域活性化のためのお手伝いをしています。その中でも茨城大学の学生たちは積極的で、ボランティアは当たり前と思っっています。彼らの姿を見てほかの学部の学生たちも地域活動に参加するようになりました」。人文学部から始まった常陸大宮市での活動は他学部にもよい刺激と影響を与えているようです。

西野教授は「学生たちが一緒に汗を流すことで、市民の方も刺激を受けています。学生たちは四年で卒業していきますが、彼らは勝手に五か年計画を作って、後輩へと引き継がれるシステムを生み出してしまいました。後輩たちはそれを受け止めながら次のアイデアを出して行きます」と、目を細めます。市民と学生が一体となった活動に地域連携の理想の姿がうかがわれるようです。

行政区域の合併は、ともすれば旧来の地域意識のエゴを露呈させがちです。しか

し常陸大宮市と茨城大学の地域連携協定は大学が旧町村の接着剤となった好例といえることができるのではないのでしょうか。西野教授は「三年に一度開かれる西塩子の回り舞台は、旧大宮町のイベントなのですが、旧美和村の方々が組み立ての応援に訪れ、旧緒川村の方々が「お花を植えよう」と協力してくれます。茨城大学と学生たちが地域に根ざした活動を行ってきたため、こうした地域間交流も盛んになりました」と、成果の一端を披露してくれました。

しかも、卒業後も地域活性化のため役立ちたいと希望した茨大生が一念発起して常陸大宮市役所に入庁するという、うれしい事件も発生しました。

地域連携協定を結んでから九年目。茨城大学と常陸大宮市の結びつきは、今後とも茨城県北のまちづくりのモデルケースとして目が離せません。



人文学部教授

西野 由希子

Yukiko Nishino

人文学部准教授

小原 規宏

Norihiro Obara

Profile: 西野由希子

お茶の水女子大学博士課程単位取得退学、お茶の水女子大学助手を経て、茨城大学へ。中国文学、中国文化を研究。常陸大宮市との地域連携に当初から関わり、地域の人々と交流を深める。現地には毎日のように訪れる、人文学部の地域連携の先導者

Profile: 小原規宏

東京都立大学博士課程修了。人文地理学・地誌学を通して村おこしなどの活動に関わる。県内の各行政の農業・観光振興でのアドバイザーを務める。人の営みを大切に地域振興を図る





教育学部准教授

片口 直樹

Naoki Kataguchi

Profile

金沢美術工芸大学修士課程修了。油絵の画家として学生時代から活躍する傍ら、美術教育にも熱心に取り組み、県近代美術館などでのワークショップのほか教員育成にも尽力する。自らの創作活動は高い評価を得ている



各地でワークショップを展開し 幼児からお年寄りまで美術教育を推進

油絵の作家、そして美術の教育者のふたつの顔を持つ片口直樹准教授は、幼少時代から「写真や漫画を写し取ることが好きだった」といいます。美術の道へ進み、大学では、美術系

大学最終学年を対象とした、芸術を志す学生にとっては最高峰と目される国際龍富土美術賞を受賞。さらに天理ビエンナーレ2005で大賞を受賞するなど、美術作家として輝かしい実績を積み上げてきました。

大学院修了後、美術教員として出身地の地元・大阪の高校に勤務、以来、表現者としての創作活動とそれを支える日々の生活、どちらも大切にしながら、美術教育に携わってきました。茨城大学へ赴任する直前には、片口准教授は地元小学校で1年生を対象とした「にじのたね」というワークショップを開催しました。

「2日間にわたった制作活動でした。作家として、自ら自由に描きたいという思いはあります。子どもたちと一緒に楽しみたいという気持ちもあります。子どもたちにもそれぞれの思いがあります。すべてが融合し、最終的に何かの形になれば良いのです。自分が絵筆を握らずとも、子どもたちと共に大きな絵を描きたい」「引きこもって創作することも芸術活動ですが、このように地域に出て行くの

も芸術活動です。両方とも絵画作品です」と、美術を通して地域との関わりを深めています。

「純粹に楽しむ中で、それだけではなく、参加した人が何か一つでも気づきを得られれば大成功」という気持ちで、作家としての教育活動・社会活動をしています。

現在、片口准教授は茨城県近代美術館のほか水戸市内の幼稚園、常総市教育委員会など

さまざまな場所でワークショップを展開しています。

常総市では小中学校の美術教師を対象とした研修会の講師を務め、受講者との共同作業を実践しました。「5分あれば、その場のパフォーマンスで人々を感動させることはできます。しかし自己満足になってしまっただけなのではないです。逆に相手だけが楽しいのでは足りません。教える側自身が楽しみたい」というのが、片口准教授の美術教育の方法論。活動の場は茨城大学の外へと広がっています。

美術という科目は、国語や算数などの机上で学ぶ科目と比較して、より専門的に思え、必須科目とは少し離れたイメージがありますが、片口准教授は「美術教育はなくてはならない分野なのです」と、その必要性を強調します。

「かつて、お年寄り向けの絵画教室の講師をしていたとき、教室に通う方の中に『今日も先生と話しに来たよ』という方がたくさんいらっしゃいました。自分が制作した作品を通して他人に何かを伝えるというだけではない、ということ。絵をきっかけに、人と心を通わせることが出来る。絵を教える仕事に就くことでそれが出来る、と感じていました」

「美術教育は想像する力や表現する力を育むという側面を中心に考えがちですが、人に伝



える、他人の心を受け取る、そういった人間としての心の育成が、美術教育にこそできる教育だと考えています」。片口准教授は美術だからこそできる教育の大切さを教えてくれました。

「作家としての創作活動はしんどい」と苦笑する片口准教授。創作家であり、大学の美術教員である自らの力を、大学の外でも発揮し続けています。これからも、さまざまなイベントやワークショップで片口准教授の姿を目にすることができるといいます。





茨城県北のジオパークを推進 地域振興の一端を担う

地質・地形など地球の活動によって生じた景観を地域資源として活用し、地域振興を目的とする知的観光(ジオツーリズム)に役立てようとする「ジオパーク(大地の公園)」が、茨城県北地域にあるのをご存知でしょうか。その「茨城県北ジオパーク」運営の推進役として先頭に立っているのが、理学部の天野一男教授です。

イギリスの地質学者であるアーサー・ホームズの著書「一般地質学」に触発されて地質学の研究の道を選んできた天野教授は、「イギリスを旅した時に、ドライブインで普通にその周辺の地質や地形を市民向けに解説したパンフレットが1ポンド程度で売られ、誰でも簡単に手に取ることができました。国民にジオ(地質・地形)という概念が根ざしている」と感じ、地質や地形の観光資源としての活用が先進国で発展していることに直に触れたそうです。

そして、近年になってジオパークが日本に広まる前から、「ジオパークは自然の保護という側面と同時に、地域の持つ地形・地質を科学教育にも活用したり、地域振興にも役立てることができる」と、その意義をいち早く理解し、地域のために役立てられないかと考えていた先駆者です。

ジオパークには世界機関である「世界ジオ

パークネットワーク(GGN)が審査認定する世界ジオパーク、国内認定機関として「日本ジオパーク委員会」が審査認定する日本ジオパークがあります。

ジオパークに認定されるためには、地質遺産として貴重な地形や景観を保ち、それが地域の観光資源としての役割を果たし、しかもそこを訪れた人々の興味や理解を深めるための環境や体制があるかが重要なポイントです。それらの条件を完備し、県北地域の自治体、財団法人、茨城大学からなる茨城県北ジオパーク推進協議会は、2011年9月、日本ジオパークとして「茨城県北ジオパーク」として認定を受けることができました。2008年に常陸太田市と日立市に分布する日本最古のカンブリア紀の地層が確認されたのもこのジオパークの圏内で、これも県北の地質遺産の重要性を認識させる後押しになりました。

天野教授は「私たちが立っている大地が基本です。その上に生命が生まれて、生態系が確立し、今の私たちの暮らしが成り立っているのです」と、ジオ(大地)と私たちの日々の暮らしの関わりをとらえます。

ジオパークの認定を受けたことで天野教授の活動はさらに大きく動き始めます。

茨城県北ジオパーク推進協議会と茨城大学

の学生を中心とした地質情報活用プロジェクトは、「地質観光マップ」を次々と作成しています。

これは、ジオパーク内の地質と観光の情報を含めた、地域をより深く知ることのできる三つ折の案内書です。一般の観光パンフレットとはひと味違い、地質を中心とした見所を掲載した、知的好奇心をくすぐる内容で、「ジオツアー」の手引書となるものです。

ジオツアーは「今は東アジア全体に広がっています。知的観光ツアーは世界的に広がっています。ツアーにはジオパークの理念を理



解し、地質遺産の魅力を一般の方々にわかりやすく伝えることのできるインタープリター(案内人)が必要です。私たちの養成講座を経て県北ジオパークに登録しているインタープリターは、現在171人にのぼります。県北ジオパークの案内人の養成も、大学教員であり専門家である私たちの大切な使命」と、天野教授は人材育成にも意欲的です。

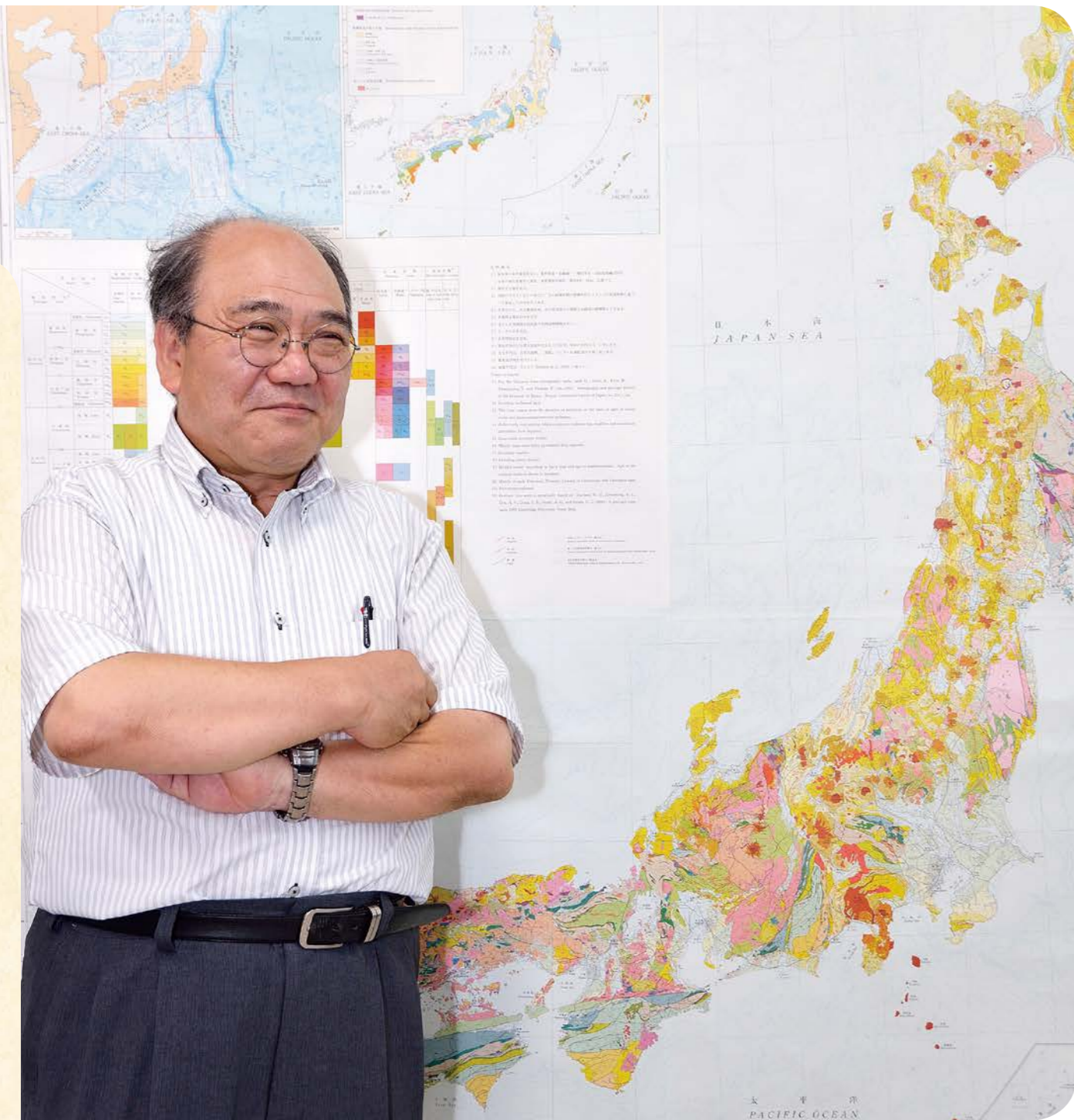
国内では市町村など自治体がジオパークを率いるのが通例です。しかし、本県では茨城大学の活動がジオパークの認定を実現させました。これからは、市町村との強い連携のもとに事業を活発に展開することが大切です。

天野教授はジオパークの将来を見据え、「産官学民に加えて、今回は『銀行』という『金』が応援してくれました。これは全国でも珍しい事例で、県北ジオパークの発展にとって大きな力になるでしょう。地域に根ざす大学として、地域振興のために、力を尽くしたい」と話します。

東日本大震災後、被災地域の観光復興への道のりは遠いかも知れません。しかし、天野教授は「福島県を含めて、この地域のジオパークでの地域おこしの可能性は無限大と、ジオパークが地域の力となる未来像を描いています」。

Profile

東北大学大学院博士課程修了。地質学の歴史のストーリーに魅せられた、茨城大学一筋の地質学の研究者。地球規模での東アジアの地殻変動などにも目を向け、グローバルな視点で茨城を捉える



理学部教授
天野 一男

Kazuo Amano



地域に開かれた工学部を 外へ向かい、顔が見える学生であれ

工学部のキャンパスのある日立市はかつて「工都」と呼ばれ、日立製作所を中心として製造業が大きな発展をみせた土地でした。高萩市育ちの米倉教授は青春時代を日立の高校で過ごしました。1991年に工学部に着任し、地元出身の研究者として県北の都市の変遷を見つめてきました。

「茨城の県北は、過疎化により産業が低迷しています。日立製作所を主な取引先とする下請け中小企業が多く、日立製作所が好調なときは、中小企業も潤っていました。街にも賑わいがありました。ところが、日立製作所の景気が悪くなると下請けに仕事が降りてこなくなり、街も活気がなくなり、シャッターを降ろす店が増えて行きました」と、米倉教授は日立市を中心とした県北部の現状を話します。

さらに「私が育った高萩は、私が小中学生だった頃には炭鉱が栄えていて、ものすごい勢いで人口が増えていました。しかし、東京オリンピックが終わった後の1970年頃から日立鉱山がすたれていき、街の人口が急激に減って行くのを目の当たりにしました。近年、大手企業が東南アジアやインドなどへ製造拠点を移し、製造業全体があの当時と同じような状況になりつつある。



産業の空洞化が進み、雇用のあり方も乱れ、正社員が少なくなり、組織がいびつな形になりつつあります」と、米倉教授は言います。そして「震災前からの傾向ですが、日立高萩、北茨城では毎年2〜3000人規模で人口が減っています。それとは逆につくばなどの県南では同じ規模で人口が増えています。県北と県南の格差が開いているという構造になっている」と危機感を抱き、工学部の地域における役割を考えはじめました。

「工学部はこれまでものづくりを中心にやってきましたが、産業構造が変わりつつある中、その変化に合わせて、もしくは変化そのものを良い方向へリードしていかねければなりません。コソコソとやるものづくりももちろん大切ですが、その他にハイテク、ビジネス化についてもっと考えなくてはいけない。どういうソフトを作って、それをどうビジネスにつなげるか。企画力が大切」と、米倉教授は考えています。

その上で、「売れる技術やアイデアを提案して、マーケティングや企業経営まで一緒に考えることができる人材を育成するのが工学部の役目」と強調します。

これまで工学部では地元企業との共同研究や共同特許申請などで目覚ましい成果を上げて来ました。にもかかわらず、一般市民からは「工学部は何をしているところなのか分からない」という声があったそうです。

そこで「市民に顔が見える活動を通して、茨城大学工学部ファンを作る」とさらには「災害時などには大学と地域と一緒に活動できること」を目標に、工学部から企業や市民への情報発信を推し進めました。

その一例が、地域メディアとの連携強化です。

日立のケーブルテレビ局JWAYでは、現役学生が学内の出来事や研究室の様子などを紹介する「Go!Go!工学ガール」という15分番組を放映しています。同局のディレクターが工学部のOBであるという縁から実現した番組で、毎日定時に放送されています。この番組は、大学との連携によるコミュニケーション制作の取り組みとして、全国のケーブルテレビの機関誌で紹介されました。

さらにコミュニティー放送のFMひたちでは、地元企業の社長や工学部の先生方にインタビューする「そうだ社長になろう」「そうだ教授になろう」という企画コーナーがメインの「びたっとラジオ」という番組も放送しています。

「大学と地域が共に発展するために、双方を結び番組です。教員も学生も、積極的に地域に顔を見せて欲しい」「工学部は社会に貢献できるエンジニアリングを目指しています。地元で貢献できる、地元を元気づけるような学部にしたいですね」と、米倉教授は、工学部の技術と人が地元の経済を元気にすることを目指して、今日も新しい作戦を考えています。



工学部教授、工学部長・理工学研究科長

米倉 達広

Tatsuhiro Yonekura

Profile

名古屋大学大学院修了後、外資系の企業に入社、米国の本社への長期派遣を経て、大学へ復学した後学位取得。地元・高萩市に戻り工学部へ。地元地域の移り変わりとう大学の関わり方を模索。積極的に地域に貢献できる人材を養成する





放射性物質による土壌汚染の現場で 農地の再生に農学部が挑む

本学農学部にてわずか十日後、西脇助教は東日本大震災を体験しました。地震と津波による被害のみならず、福島第一原子力発電所の施設損壊に伴う放射性物質の漏出によって、土壌汚染問題が発生しました。現在、西脇助教は、福島で土壌のモニタリングの調査を行い、地域の人々とともに汗を流しています。

西脇助教は小学生時代に環境問題について興味を抱きました。「親も環境問題に関心を持っていましたし、当時は毎日のように地球温暖化や酸性雨問題などが報道されていた

ていました」

母親からレイチェル・カーソンの著書を薦められたのもその頃だったそう。環境汚染の問題を告発したアメリカの生物学者の著作に影響を受けた西脇助教は、環境問題に関わる研究者として生きることを決意したのです。

専門は、地下水の動きに関連した土壌汚染物質の動きを解明する研究です。「ドライクリーニングや半導体の洗浄などに使われていたトリクロロエチレンなどが、発がん性物質であると指摘され禁止されました。これらの物質が土の中でどう動くのか、その動きの研究です」

西脇助教は環境汚染問題の研究で着実に成果を挙げていきます。

今回の、福島における活動は、こうした成果の上に試みられています。

「福島の現場へ入ってNPO『ふくしま再生の会』のメンバーや地元農家さんと一緒に、元の豊かな農地を取り戻せないか——という活動を行っています。現在、放射性物質で汚染された農地の除染作業が進み、表土がはぎ取られています。長い年月をかけて育んできた、小動物や微生物が息する耕作に適した土を取り去ってしまうのです。元

の豊かな農地に戻すために、どうしたら良いか。有機農法の手法で解決できないか」と、西脇助教は福島へ通い続けています。

西脇助教は「表土をはぎ取った農地では有機物をゆっくりと分解して、元の豊かな農地に戻せないかと研究しています。工業的に外から土を持ち込むのではなく、今の土地にあるもので工夫をしていきたいのです。震災後収穫した稲わらを土に踏み込む方法を実用化できないか、様々な検証を行っています」。

まさにその場所で働き、生活する地元の方の健康に支障がない放射線量の土地でも、放射性物質が含まれているとされた土地から生育した作物に対し、消費者は大きな不安と恐れを抱いています。西脇助教は、「まだ検証の途中ですが、土壌にしっかりと吸着した放射性物質は、土中で移動することはほとんどなく、作物への移行も少ないと考えています」。

実証実験を繰り返して、データを積み上げる地道な研究、調査が現在も続いています。それが被災地の農家の復興への手助けとなり、消費者が風評に惑わされず判断する手助けにもなる大きな可能性を秘めています。

「今まで土壌汚染を研究してきましたが、有機農法に関する試みは始めたばかりです」

と言う西脇助教、実は福島県いわき市の出身です。

「震災直後に着任して、福島の放射性物質汚染に関わるなんて思いもかけないことでしたが、私の中で使命感が生まれました。これまでさまざまな研究のお手伝いの立場でしたが、茨城大学に着任し、自分の考えで研究ができる立場になりました。興味関心を突き詰めるだけでなく、何かに役立てることができると、それがやっと実現しました」

西脇助教は茨城大学での自らの存在価値を再認識し、地域貢献活動を実践しています。

さらに「農学部の先生方はとても気さくな人、放射性物質汚染について深い知識があり、福島での活動に関していろいろと協力いただいています。さらに先生方だけでなく、農学部では教職員や学生の多くが、風評を気にせず、福島のお土産を純粋に喜んでくださいます。一般の方々も不安に思っていることがあれば、本質を自分で判断して欲しいと思います。現場へ行って自分の目で見て、感じて判断をして欲しい。どんなことでも興味の幅を広げることが大切」と、マスコミや風評に惑わされないことの大切さを話してくれました。



農学部助教

西脇 淳子

Junko Nishiwaki



Profile

東京大学大学院博士後期課程修了後、産総研や明治大学での研究員を経て、茨城大学農学部へ。東日本大震災直前に着任し、福島県の放射性物質汚染の問題に関わる。月2回、週末に現地へ赴き、現地NPOと共に研究を続けている

CAMPUS TOPICS & NEWS



人文学部と茨城町が地域連携に関する協定

人文学部と茨城町は地域の発展と産業の振興を図るために、平成25年1月23日(水)に地域連携に関する協定を結びました。地域資源活用による交流人口の増加対策や農業を基盤としたいわゆる6次産業への展開方策、まちづくり全般に関する連携、学生を含めた協働のまちづくり実践に関する連携を図ります。

まちづくりに関する組織的、持続的な調査研究、また、インターンシップなどを通じた学生の政策提言能力育成等にも大きな成果が見込まれます。



筑波銀行との地域連携にかかる協定

平成24年11月30日(金)、株式会社筑波銀行との連携協力にかかる協定調印式を行いました。この協定は、筑波銀行と茨城大学とが相互に連携して、それぞれが保有する資源・情報を有効に活用し、地域の発展及び発展に資する人材の育成に寄与することを目的として結ぶものです。

今後、茨城県北ジオパーク事業等の諸活動で、観光振興や地域貢献を連携して推進していきます。



人文学部教授の研究成果がサイエンス誌に掲載

人文学部青山和夫教授が領域代表の科研費新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」の研究成果が、米国サイエンス誌に掲載されました。グアテマラにあるセイバル遺跡の大規模で層位的な発掘調査と放射性炭素(14C)年代による編年の結果、マヤ文明の特徴である公共祭祀建築は、従来の学説より約200年早い、前1000年頃に建設されたと判明しました。研究の成果から、マヤ文明の起源に関する従来の有力説とは異なる、より複雑な社会変化の過程が示唆されます。



「美濃和紙あかりアート展」で優秀作品に入選

「第19回美濃和紙あかりアート展」において、茨城大学生による2作品が優秀作品として入選しました。作品名『KASANE』(坂本薫・大森麻衣・石塚真実)は、様々な模様の傘を重ねることで、和紙と「あかり」の作り出す影の美しさを表現しました。作品名『瀧』(鳥居美伸・真壁悠久・増測美聖)は、和紙の柔らかさと格子状の細い角材のシャープさを組み合わせて、日本建築の持つ美しさや暖かみを表現しました。

CAMPUS TOPICS & NEWS



いばらきイメージアップ大賞奨励賞を受賞

平成25年2月6日(水)、『いばらきイメージアップ大賞』で茨城大学と北茨城市が取り組んだ「六角堂を中心とした北茨城市の復興まちづくり」が過去最高の206件の応募の中から、奨励賞を受賞しました。北茨城市を代表する貴重な財産・観光資源である「六角堂」の再建への取り組みが、復興のシンボルとして多くの市民に勇気や希望を与えたと評価されました。



「天心・六角堂プロジェクト」がグッドデザイン賞

茨城大学の「天心・六角堂プロジェクト」活動が「2012年度グッドデザイン賞」(公益財団法人日本デザイン振興会主催)を受賞しました。東日本大震災で流出した「六角堂」を、地方自治体、文化施設、観光組合、市民団体等と連携して再建を果たした活動で、「単なる復元という枠を超え、創建当初の天心の精神をも読み取ることによって、被災した多くの人々に勇気や希望を与え、地域振興の力に繋がった」ことが高く評価されました。



人文学部が常陸太田市と地域連携に関する協定締結

人文学部と常陸太田市は、様々な行政課題を抱える地域への知識・技術及び人材の提供やPBL(問題解決型学習)等を通じた人材育成を図るため、平成25年7月24日(水)に地域連携に関する協定を結びました。(1)地域特性を生かした産業の振興とまちづくりの推進、(2)地域の発展に寄与する人材の育成、(3)人的交流の促進による地域コミュニティの活性化、(4)地域の政策課題に関する共同研究の推進の4つの事項を中心として活動を展開していきます。



茨城大学と水戸ホーリーホックが連携協定を締結

平成25年3月3日(日)に、ケースデンキスタジアム水戸で、株式会社フットボールクラブ水戸ホーリーホックとの連携協力にかかる協定調印式を開催しました。この協定は、水戸ホーリーホックと本学とが相互の特性を生かした連携事業を推進することにより、水戸市及び関係地域の活性化及び両者の一層の発展に寄与することを目的としています。調印式では、本学内に設立された『水戸ホーリーホック応援ネットワーク』の活動内容を含めた両機関の連携活動の予定が紹介されました。



農学部と茨城県立医療大学が連携協定を締結

農学部と茨城県立医療大学は平成25年2月7日(木)、両大学がそれぞれの特色を活かして相互に連携・協力し、有為な人材の育成、研究の発展及び地域医療の充実に寄与することを目的に連携協定を締結しました。今後、隣接する本学農学部と茨城県立医療大学は、協定内容である単位互換、サークル活動の共同化、共同研究や地域貢献事業、図書館の相互利用について推進していく予定です。



農医連携事業キックオフシンポジウム開催

農学部は平成25年7月30日(火)、隣接する茨城県立医療大学、東京医科大学茨城医療センターと共に、阿見キャンパスで「農医連携事業キックオフシンポジウム・3大学交流セミナー」を開催しました。事業のプロジェクト名は「心身の健康を維持・改善する農医連携研究の推進」。シンポジウムには、3大学の教職員及び近隣の研究機関の職員等を含め約100名が参加しました。



環境人材育成で4大学が単位互換協定を締結

平成25年4月19日(金)、学生会館で茨城大学・信州大学・横浜国立大学・広島大学が環境人材育成のためのグリーンマネジメントプログラムに関して、単位互換協定を締結しました。このプログラムは、環境配慮型経営の専門家を育成を目指した大学院修士課程の副専攻プログラムとして、環境人材育成コンソーシアム(EcoLeaD)が事務局を務め、メンバーである4大学が協働して企業価値を創出する環境経営が推進できる「環境人材」を育成するためにスタートしたものです。



「インテリアデザインコンペ2012」で優秀賞受賞

「第9回インテリアデザインコンペ2012」で、教育学部情報文化課程の学生が入選しました。受賞作品「スクリーンでつなげる新しい幸せの形〜ソーシャル・インテリア・ビジネス〜」(石原英美・大森麻衣・増測美聖・五十嵐崇道・齋藤芳徳教授)は、ロールスクリーンで自分の「思い(幸せ)」を外部に発信し、共通の思いを持つ人が集まり暮らすことで交流を生み、SNS等を活用して外部の集合住宅とも繋がっていく、新しい集合住宅の住まい方を提案しました。

東欧文学の研究と並行して創作に励み 江戸川乱歩賞作家として活躍する



2012年12月6日 ロシア大使館講堂にて
亀山郁夫さん・高野史緒さん・沼野充義さん公開講談

日本の文学界において、小説家を目指す「作家の卵」と呼ばれる人は何人いるのでしょうか？

小説家として名を馳せ、現代日本の文壇で活躍するようになる人はその中のほんのひと握り。今、日本の文学界で注目され、ひとときわ輝きを放っているのが高野さんです。

高野さんのこれまでの歩みを振り返ってみると、1988年に「ニジンスキーをテーマとした演劇脚本『エレヴァン』」が第2回青山円形劇場脚本コンクールにおいて佳作入選、さらに94年の第6回日本ファンタジーノベル大賞に応募した『ムジカ・マキーナ』が最終選考を通過、翌年、新潮社から同作品が出版され、文壇にデビューします。

さらに2012年、『カラマーゾフの妹』で第58回江戸川乱歩賞を受賞。ヨーロッパを舞台に、歴史・芸術・音楽をモチーフにしたファンタジー性あふれる高野さんの作品群は、多くの読者を引きつけています。

土浦市出身の高野さんが茨城大学を進学先として選んだ理由は、自宅から通える国立大学であることもさることながら、「84年、85年当時はバブル景気に向かって、女子大生ブームなどが起きた時代でした。そのような中で、茨大には青臭い哲学的な学生が多いようなイメージがあり、いわばバンカラの雰囲気がある茨大に好印象を持っていたからです」とのこと。

「大学では歴史を勉強しました。特に西洋史を学ぶ学生たちは個人主義的で、みんなでわいわいとコンパをやるような雰囲気ではなかったところに応募するスタイルです」

「実は私は、職業作家になりたかった訳ではありません。それよりも研究者として身を立っていたと思っていました」と言うところ、高野さんは東欧文学の研究にも情熱を注いでいます。

文学を「研究対象」とする姿勢は、乱歩賞を受賞した『カラマーゾフの妹』という成果も生みました。高野さんは「ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』を研究者の視点で分析し、130年間誰も気づかなかったポイントを発見しました。その発見をもとに執筆した創作編が『カラマーゾフの妹』で、論文編が『ミステリとしてのカラマーゾフの兄弟です』と『カラマーゾフの妹』が生まれた経緯を話し

困気ではありませんでした。そういう空気が私に合っていました」

「高校時代から文芸部に所属していたのですがそれは名前だけで、当時からアマチュアコーラスグループに属していたので、大学時代も、もっぱらそちらの活動に没頭していたのです」と、高野さんは学生生活を振り返ります。

「当時、カリキュラムは自由なところがあって、人文学部の私が、教育学部で音楽の授業を受けさせていただけました」卒業を前に開催する「謝恩会」を、人文学部の先生方は絶対に「謝恩会」とは呼ばせませんでした。「食事会」とか「お別れ会」と呼ばせるのです。「俺たちは、お前たちに恩なんか売っていない」というようなバンカラな雰囲気、先生方も持っていた「私」と、いかにも茨大らしいエピソードを高野さんは語ってくれました。

学生時代はコーラスや音楽に熱中する一方、西洋史の知識を生かした短編小説を書き始めます。「百枚ほどの短編を年に一回はコンテストに応募していました。一回は本格的に小説を書きたいとは思っていませんでした」

しかし大学二年生の時に、一般公募の文学賞への初応募であったハヤカワSFコンテストで一次選考を通過。「気分を良くして」創作を続け、その後ファンタジーノベル大賞で二次選考を通過し、創作活動は本格化していきま

「私は、自分の作品を特定のカテゴリーに当てはめて考えることをしません。応募したい賞に合う作品を書くということもありません。初めに自分ありき。自分が書きたいものを書くのです。その作品を、

最後に高野さんは「若者は是非、まずは自分のテリトリーを離れて、外へ、世界へ目を向けてみて欲しいと思います。物理的に無理ならば、精神的に良いのです。私も、東欧文学のアンソロジーを編んだ時には、東欧諸国の関係者と数々の交渉をこなしましたが、今の時代ですから、七割方は我が身は自宅のPCの前、というのが種明かしです。地域貢献を考

えるにしても、先に外の世界を良く見てから、改めて地元へ目を向けると、新しいものが見えてくるはず」と、後輩へエールを贈ってくれました。作家を目指す人へのアドバイスも。「他人の小説を読むより、小説以外のことを考え、経験することが大切です」

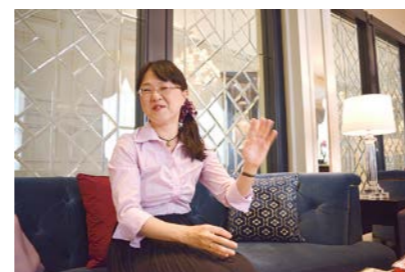


INTERVIEWS

ALUMNI

Novelist : Fumio Takano

Profile
茨城大学人文学部卒、お茶の水女子大学修士課程修了。西洋史に根ざした作品を発表し、多くのファンを魅了する。講演、大学の講義等も行っている。日本文藝家協会会員、日本ロシア協会普通会員。



小説家
高野 史緒 さん
[人文学部卒]

アンケート・アートという芸術表現で 人々の心理を音楽化する試み



「アンケート・アート」という独自の芸術表現で、メディアアートのトップランナーに列する松本さんの原点は茨城大学在学時代にありませぬ。

「アンケート・アート」とは、「憲法9条をどう思いますか？」などさまざまな問題についてアンケートを実施、寄せられた回答を品詞分解し、品詞ごとに定めた音階（音の高低）、単語の長短で定めた音価（音の長さ）に置き換え、メロディーを作り出すものです。

この表現方法は、言葉の意味にとらわれることなく文章の構造だけを音楽化するわけですが、聴き手は同時にアンケート回答のテキストを参照することで、回答者の意見の相違をメロディーの差異に実感し、そこに現代社会の人々の思いが浮き彫りにされていることを知るので

す。

横浜生まれ、横浜育ちの松本さんは「子どもの頃は一人でプラモデル作りやレゴブロック遊びをするような少年でした。元々理系の成績が良く、電子楽器に興味があったので、半導体などの研究ができ、しかも実家から遠くなく一人暮らしができる環境がある茨城大学工学部に入学しました」と、入学の動機を語ってくれました。

音楽に親しみ始めたのは中学時代から。茨城大学では迷わずオーケストラのサークルに入り、バイオリンを担当しました。

「学生時代は週の半分は工学部がある日立市から水戸のキャンパスに通い、オーケストラの練習や自分の作曲した曲を教育学部の音楽教育の教授にみても

らったりしていたのです」。本格的な音楽家としての胎動は茨城大学で始まった――と松本さんは振り返ります。

大学卒業後、一度は電源制御機器の研究開発会社に就職しますが、一年で退社。学生時代から憧れていた作曲家・三輪眞弘先生が教鞭をとる岐阜県立国際情報科学芸術アカデミーに再入学しました。ここでの卒業制作として発表したのが「アンケート・アート」だったのです。

松本さんはこう回想します。「話は茨城大学時代に戻りますが、オーケストラの仲間や先輩たちからステイヴ・ライヒという作曲家を教えられました。水戸芸術館にも来たことがある方です。彼のオペラ『ザ・ケイヴ』という曲に感銘を受けました。インタビュアーを楽曲にしたもので、それならアンケートもあるな」と

さらに「2001年にアメリカ同時多発テロ9・11をテレビで観ました。世界が変わったと思いました。自分の中の感情を表現するのではなく、まわりにあることを集めて何か発表できないか、形にすることができないかと考えたのです」

卒業制作で初めて発表した「アンケート・アート」が一躍注目を集めるきっかけとなった出来事は2008年に起こりました。松本さんは尊敬するステイヴ・ライヒさんが「武満徹作曲賞」の審査員を務めることを知り、「一目会いたい」と、応募を決意します。

「ライヒさんはアメリカ人で、僕は日本人です。では共通のものは何だろうと考え、広島・長崎の「原爆」というテーマでアンケートを行い、英語と日本語をアンケート・アートの手法で表現しました」

松本さんは「広島・長崎の原爆投下についてどう思いますか？」を作曲して応募、見事、海外からの優秀な応募を抑え、第1位の栄誉を勝ち取ったのです。「アンケート・アート」が音楽界で認められた瞬間です。

工学部出身者でありながら、音楽を使った芸術家として「躍時の人」となった松本さん。「僕は、一人っ子ということも

あり、どちらかといえば内向的で一人でコツコツとやってきましたが、茨城大学では、サークルに入っているいろんな学部の人と知り合って社交的になりました。総合大学なので、様々な授業が受けられる開放的な雰囲気がありました」と、四年間過ごした茨城大学のキャンパスライフを振り返り、目を細めました。



INTERVIEWS

ALUMNI

Composer / Artist : Yuichi Matsumoto

Profile
茨城大学工学部卒。在学時代から作曲を手掛ける。作曲家・アーティストとしての活動の傍ら、現代音楽について話すゲストとしてラジオなどにも出演。東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻教育研究助手



作曲家・アーティスト
松本 祐一 さん
[工学部卒]

夏休みは「稲刈り休み」 サークル仲間が今では社員に



「物心がついたころから農業をやりたいと思っていました。親の手伝い、といってもほとんど遊びなのですが、田んぼでの仕事が終わった夕暮れ時に軽トラの荷台に乗って揺られて帰ってくるその時間がたまらなく好きで、自然と農業の道を進みました。横田さんは幼少時にすでに天職と出会っていたようです。

龍ヶ崎や河内、稲敷などの利根川流域は広大な穀倉地帯です。横田さんの管理する農場もそこにあります。早場米の稲作が盛んで、早くも八月には刈り取りが始まりコンバインや精米所は大忙し。若者たちが作業に汗を流していました。

「この辺は父親の代から、若い人は他に働きに出るといって、いわゆる兼業農家が稲作をしていました。当時の農業の担い手は、元気なおじいさん、おばあさんでした。私の家も、そういう兼業農家でした。ところが、母親が20代の頃に体調を崩してしまつたため、父が農業に専念することになったのです」と横田さんは当時の状況を語ります。

「専業で農業をやっている若い人はうちの父親ぐらいでした。お年寄りの方々が農業を続けられなくなり、廃業する農家が増えて、父に農地を任せたいというお申し出があつたのです。それが、現在100haを超える農地を管理する法人へと成長するきっかけでした。

横田さん自身は龍ヶ崎一高を卒業後、「農業を地元で学びたい」と、茨城大学農学部へと進学しました。

在学時の横田さんは「先進農家の調査をしたりする農業経済を専攻しました。水稲に関する技術的な研究はすでに確立

していたので、農場経営の方法を構造的に調査して、卒論のテーマとしました。」

実は、横田さんは父親からは「農業を継いで欲しい」と言われたことはないそうです。大学卒業を控えて、自ら家業を継ぐ決意を父親に告げたときが、横田農場の法人化へのターニングポイントでした。横田農場には、農地を任せたいという相談がひきもきらず寄せられています。「毎年10haのペースで管理地が拡大し続けています。地域の皆さんから信頼していただけていると感じ、ありがたく思っています」と横田さんは地域を支える重責を感じさせない笑顔で話します。

大規模な農地を管理する横田農場ですが、意外なことに田植え機も刈り取り機も1台ずつしかありません。農機が自走できる範囲で効率的な運用を図り、農業経営の効率化を推し進めているからです。

「作付け時期の早い品種、遅い品種をうまく組み合わせ、一台の農機で作業できる範囲ずつ、約二か月かけて作付けします。そのため、農地が拡大しても一台の農機でやりくりできています。」一台の農機を通常の農家より長い期間フル稼働するので、故障にも即対応できる態勢が重要です。その機械担当は、大学時代のサークル仲間、工学部出身の友。横田さんが茨城大学で得た知識と人脈が現在の農業経営に生かされています。「特に意識したわけではないのですが、農場には今、茨城大学卒業生がなんと五人も働いています。

これまで各農家では、生産したお米の出荷先はほぼJAに限られていました。

横田さんは農業協同組合に頼らず、自主販売、販路拡大に力を注いできました。

「精米、玄米の直売のほか、米粉を使った製品の販売、加工業者へ出荷する体制を整えました。加工用米は酒米、おせんべい、おもち、味噌麹などに使っています。奥様が担当する米粉100%のシフォンケーキのお店は、近隣から多くのお客様が訪れる人気店です。」

従業員と共に、常に前進し続ける横田さんの農場経営は、2003年に茨城県環境にやさしい農業推進大会で最優秀賞を受賞したほか、2013年には毎日新聞社主催第62回全国農業コンクールで名誉賞・農林水産大臣賞を受賞、さらに第52回農林水産祭の農産部門で最高賞の天皇杯を受賞しました。

全国規模での受賞歴を誇る横田さんの農場には、熱意と笑顔があふれています。



Farmer : Shuichi Yokota

Profile
茨城大学農学部卒。大学時代は熱気球のサークルでパイロットを務め、大会で好成績を残した。奥様とはサークル以来のよきパートナー。「みんなの笑顔のために」をモットーに、地域のため、そして日本の農業のため、大規模農場経営の可能性に挑み続ける



有限会社横田農場
代表取締役
横田 修一 さん
[農学部卒]

課題解決型学習 (PBL:Project Based Learning) から授業を広げた「さとみ・あい」の活動は、人文学部と常陸太田市による地域連携に関する協定締結 (P19) のきっかけとなった

茨城大学地域活性化プロジェクトチーム 「さとみ・あい」

人文学部 白土可奈子さんほか



「さとみ・あい」は、茨城大学の「根力育成プログラム」に基づき、プロジェクト実習という人文学部の専門科目の授業から生まれました。

「先が見通せない社会へ学生を送り出さなくてはならないことを前提に」答えのない問題「に対して最善解を導く能力の育成」を目的としたプロジェクト実習。人文学部鈴木敦教授は大学とその近辺を主たるフィールドとするプロジェクト実習Aを担当。山形県最上地域の過疎地で、地域全体等キャンパスに見立て、地元の人的資源と大学を繋ぎ、仮想大学を作るというプロジェクトに関わった経験を持つ大学教育センター峰屋大八准教授は、地域おこしの活動が始まっていた旧里美村の地域、常陸太田市里美地区に注目して、ここをフィールドにプロジェクト実習Bを立ち上げました。幸い、常陸太田市役所、里美地区住民の皆さん、里美地区で活動している地域おこし協力隊の皆さんのご協力をいただけたことになり、具体的な活動がスタートしました。

学生たちがまず考えたのは、「さとみCafe」。里美地区で地元農産物を使ったメニューを提供するカフェを開くプロジェクトです。

大学側が一方的に要望を提示し、地域の協力を仰ぐようなかたちではなく、地域のニーズに沿って、大学、学生が構想を練り、実現に向けてその力を発揮するのだけならば本当の意味での地域貢献にならない——そんな信条に基づく里美Cafeチームの活動は、少しずつ地元からの信頼を得ることができたようです。学生の活動を知った地域の方から「里

茨城大学生の「根力」育成を实践する場として 常陸太田市里美地区を舞台に活躍

なって計画、グリーンふるさと振興機構と連携して、滝めぐり、温泉など里美地区の魅力を活かす旅が企画されました。

このプロジェクト実習は、常磐大学、茨城キリスト教大学との単位互換科目に指定されているため、ツアーには三大学から学生が参加しました。

そして、実習から生まれた「里美Cafe」「里川かぼちゃ」「里美トラベル」の三つのチームは、大学の講義の枠を飛び越え、昨年度の受講者、受講生以外から参加した協力者も交えて、里美を愛するネーミングを掲げたサークル「さとみ・あい」としての活動を開始するに至り、今年三月には、常陽ビジネスアワード2012(常陽銀行主催)の奨励賞を受賞しました。八月には「さとみ・あい合宿」を実施。里美地区のきれいな水を守り、未来に伝える地域団体「里美の水プロジェクト」が主催する「水のCafe」に参加し、カフェや小川遊びを通して地元の皆さん、そして子どもたちとの交流を深めました。

里美Cafeチームのリーダー、人文学部の板垣里沙さんは「水戸市の泉町会館でも一日限定のカフェを開く予定です。里美地区の農産物を使ったメニューや、お

美特産のカボチャがあるが、ただ出荷すると一つ300円くらい。何か付加価値を付ける方策はないだろうか」という相談がありました。

里美地区で生産されている、皮が薄ピンク色の「里川カボチャ」は、古くからある同地区の固有種です。これを特産品として売り出したいという地域住民の熱意に応え「かぼちゃ」チームが誕生しました。チームは、里川カボチャのブランド化を目指し、プリン、蒸しパンなど12品目ものレシピを開発したのです。

また、「里美トラベル」チームは、参加者を女子大学生に限定したバスツアー「女子旅in常陸太田」を企画しました。日帰りのツアーをチームの学生が主体と



いしい里美ブランドの製品を提供し、水戸の皆さんに里美の魅力を伝えたいです。」と意気込みを語ってくれました。

同じく里美Cafeチームの人文学部の出口貴仁さんは、「十月にも合宿を行い、里美中学校で講演会も実施します。イベントを企画するのは大変ですが、メンバー全員が協力して進めています。これからさらに活動の場を広げていきたい」と話してくれました。

十一月に里美地区で開催される「さとみ秋の味覚祭」にはかぼちゃペースを出店する予定。また、コロッケなど新メニューのお披露目を開催したり、各大学の学園祭で里川かぼちゃチームと里美Cafeチームが出店するなど、今後のスケ

ジュールから目が離せません。学生たちは、イベントの準備やカボチャ畑の世話のため、毎月何度も、現地へ赴きます。そんな彼らの様子を見て、チームを導いた蜂屋准教授は「学生たちの里美への愛情は尋常じゃないですよ」と目を細めます。「工場や産産を誘致することだけが地域活性化ではない、草の根の交流によって、地域の人々の地元への愛情が高まり、やがてこの地域に住んでみたいと思う人が増えるようになること。それが理想なのだ」と。

「里美を愛する」「里美で出会う」の意味を込めた「さとみ・あい」。その活動はこれからも出会いと愛情を大切に、里美地区に広く深く根を張っていくでしょう。



「子どもふれあい隊」 大子町における、 地域活性化プロジェクト

理学部 相良祐希さんほか

大子町に子どもたちを誘引して開かれる夏のキャンプはいまや恒例行事で「子ども大好き」学生が集うサークル活動として、地域活性化の期待を担う。大学サークルの枠を超えた活動に、地域の期待も高まっている



子どもたちと一緒に大子町を活性化 地元のひととともに廃校を蘇らせる

標を掲げてサークルの方向性を確認しようそうです。

今年は「隊員としての誇りを持ち、主体的に行動することによって、自他ともに未来に良い影響を与える」というミッションを掲げました。

旧初原小学校は廃校後、企画・イベント・地域住民交流の場「初原ぼっちの学校」として、地元住民の協力のもと運営されています。「ぼっち」というのは地元の方言で「ひとかたまりずつのもの」という意味があり、地域の結束と初原地区の風物「わらぼっち」を表しているそうです。

キャンプの開催場所はこの小学校を使わせてもらうお礼の意味も含め、学生たちは「ぼっちの週末」と名付けて年間七回ほど、学校の清掃や除草、野菜の栽培や収穫の農業支援などボランティア活動を行っています。

また、冬には、大子町が実施する「放課後子ども教室」に参加するなど、さまざまな活動を通して大子町との絆を深めています。

「キャンプで使うための薪割りや流しそうめんの竹桶探しなどは地元の区長さんたちに協力いただいています。役場

の職員の方も「茨大生が来るから」と色々な面で配慮してください」と、相良隊長は茨城大学のサークルを地元の人々や行政が温かく迎えてくださることに感謝し、強い絆を感じています。

今年のキャンプも八月に行われました。毎日の食事作り、流しそうめんやキャンプファイヤー、キャンプの思い出をカルタにする「思い出カルタ」作りなど、イベントの数々を満喫し、子どもたちは、無事に帰路につきました。

相良隊長は「茨城大学は総合大学ですから、このサークルにも人文、教育、理学、工学、農学部、それぞれ専門分野の知識をもった学生が集まります。ものづくりの得意な工学部の学生がいたり、理系の学生が子どもたちの興味を引く理科実験を行ったり科学の話をしたりできる、それが僕たちのサークルの強みです」「キャンプを楽しむ中で、新しい友だちと出会い、新たな発見を感じて欲しい。今年のキャンプのテーマは、「キヤッチー友と出会いと新たな自分」。子どもたちも学生も何かを「キヤッチ」できたはずと、振り返ってくれました。

同サークルの学生たちはそれぞれ、車に分乗したり、水郡線を使ったりして、大子に通っています。「時間も経費もかかりますが、それ以上に大きなものを得られます」。取材に応じてくれたこの日には、キャンプに参加した子どもたちに渡すため、手作りの修了証を作成していました。

毎年夏になると、大子町の廃校(旧初原小学校)には子どもたちの歓声が響き渡り、賑やかだったかつての姿を取り戻します。

廃校を利用し三日間にわたるキャンプを実施しているのは、茨城大学の学生で構成されたサークル「子どもふれあい隊」です。2006年から実施されているキャンプは、地元はもちろん水戸市内などから約50人の子どもたちが参加して交流を深め合う、大子町の夏の風物詩としてすっかり定着しました。

「子どもふれあい隊」の隊長は理学部の相良祐希さん。「埼玉県など県外からの参加者もいます。毎年参加するのを楽しみにしてくれる子どもたちもいて、二泊三日のキャンプを地元の人、サークルのメンバーと一緒に、総勢約百人で楽しく過ごします」と、盛況ぶりを説明してくれました。

教育学部学生有志が子どもたちとのキャンプを企画したことから始まり、その後サークルとして組織化され、やがて「子どもが好きで、子どもに関わる活動をしたい」という学生が学部外からも参加し、現在の形態に至ったそうです。今年度は、学内の学生地域参画プロジェクトに「大子町における、地域活性化プロジェクト」として応募し、みごと採択されました。

「僕たちにとって子どもと関わることは新鮮な驚きの連続です。子どもと地域のために、という意識の高い学生が多く参加しています」と約50名のメンバーをまとめる相良隊長は言います。



発見！
茨城大学

DISCOVER
IBARAKI UNIV.



DATA

茨城大学広域水圏環境科学教育研究センター
〒311-2402 茨城県潮来市大生 1375
TEL : 0299-66-6886 FAX:0299-67-5175
<http://www.cwes.ibaraki.ac.jp>

ACCESS

東関東自動車道「潮来 IC」から 15 分
高速バス「水郷潮来」停留所からタクシーで 15 分
JR 鹿島神宮駅からタクシーで 15 分
JR 延方駅からタクシーで 10 分
東京方面からは東京駅八重洲口発の高速バス「鹿島神宮行」が便数が多く便利

水圏センターでの研究を支える教員、スタッフ。全国から訪れる研究者や学生たちの対応に追われる日々。宿泊施設もあるため、仕事は多岐にわたる。地域資源を活用した教育・研究の場として、今後ますます多くの利用が見込まれます

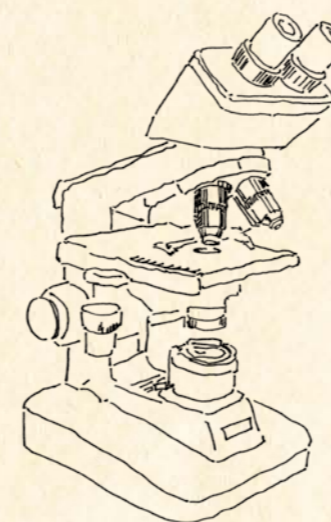


潮来市の北浦近くに位置する茨城大学広域水圏環境科学教育研究センター、通称「水圏センター」は、霞ヶ浦の流域環境に関する教育研究で長く実績を積み上げてきました。教員の指導のもと、多くの学生たちが、生物学や地質学を学び、湖沼生態系の研究や湖岸環境の保全、外来種問題の研究に日々取り組んでいます。そしてこの水圏センターは、茨城大学の中でも、他大学など学外の利用者を多く受け入れている施設の一つです。

河川・湖沼・海岸・農業・水産業・地質・歴史・防災など地域の教育資源を活用したフィールド実践教育・研究の場として多くの学生たちが利用し、平成25年度は全国の17大学と2高専から延べ400人以上の学生たちが訪れ、実習を行う予定です。

中里亮治副センター長は「今年8月、本センターは『教育関係共同利用拠点』に認定されました。この拠点は、各大学のセンターや農場などを全国の大学で共同利用するために文部科学大臣が認定するもので、湖沼関係では全国初です。『霞ヶ浦流域の水圏環境科学フィールド教育拠点』として、全国から学生を受け入れ、霞ヶ浦という絶好のフィールドを生かした実習を提供します。学生のフィールド実習のほかに、研究者の学術集会、研修会、小・中・高等学校の教育活動の拠点としてなど、幅広く利用していただきたいと思います」と、多くの方の利用を呼び掛けます。

水圏センターは、全国の研究者、学生に貢献する施設として、これからも重要な役割を担っていきます。



広域水圏環境科学 教育研究センター

湖沼関係では全国初の教育関係共同利用拠点に認定
全国から延べ400人以上の学生たちが
フィールド実習に



水戸キャンパス

| 人文学部 | 教育学部 | 理学部 |

〒310-8512
茨城県水戸市文京2-1-1
(代)029-228-8600(本部)



日立キャンパス

| 工学部 |

〒316-8511
茨城県日立市中成沢町4-12-1
(代)0294-38-5004



阿見キャンパス

| 農学部 |

〒300-0393
茨城県稲敷郡阿見町中央3-21-1
(代)029-887-1261